日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ

2013年　秋号　No.72　（2013年11月25日発行）

発行　日本行動分析学会　理事長　園山繁樹
〒540-0021　大阪市中央区大手通2-4-1　リファレンス内
FAX：06-6910-0090（日本行動分析学会事務局と明記）　URL：http://www.j-aba.jp/
E-mail：j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会機関誌編集委員会からの重要なお知らせ・・・・・・・機関誌編集委員会委員長・森山　哲美
ABAI Seventh International Conference in MERIDA Mexico
「ABAI 第7回国際会議 in メリダ」・・・・・・・・・・・・藤原　誉久・松本　啓子・宇津野　裕子・村井　佳比子
連載：いま，こんな研究会しています (8)「教育臨床学研究会」・・榎本　和生・白石　紳一・中野　良顯
連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職 (11)「長い海外生活を終えて」・・・・・・・・・・・・・・・・黒田　敏数
自著を語る：『８つの視点でうまくいく！発達障害のある子の ABA ケーススタディ―アセスメントからアプローチへつなぐコツ―』・・小笠原　恵
2014 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業」応募要項・・・・・・・・・・・・・・国際委員会
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

別名称の変更はありませんが、内容さらに規程ページ数が変更されました。他に、図表のタイトルとキャプションは、原則、英語表記となりました。詳細は、「新投稿規定」ならびに「新執筆の手びき」を参照してください。

上記の変更は、岐阜大学で開催された今年次大会の総会が行われた2013年7月27日から有効です。これから論文執筆投稿を予定しておられる方は、「新投稿規定」ならびに「新執筆の手びき」を参照してご投稿ください。いずれも学会ホームページから見ることができます。

すでに投稿していただいている方、査読を受けておられる方の論文については、旧規定で対応させていただきます。しかし、旧規定での対応は2014年3月31日までといたします。

ご不明な点があれば、編集委員会事務局宛て（下記）にお尋ねいただきますようお願いいたします。

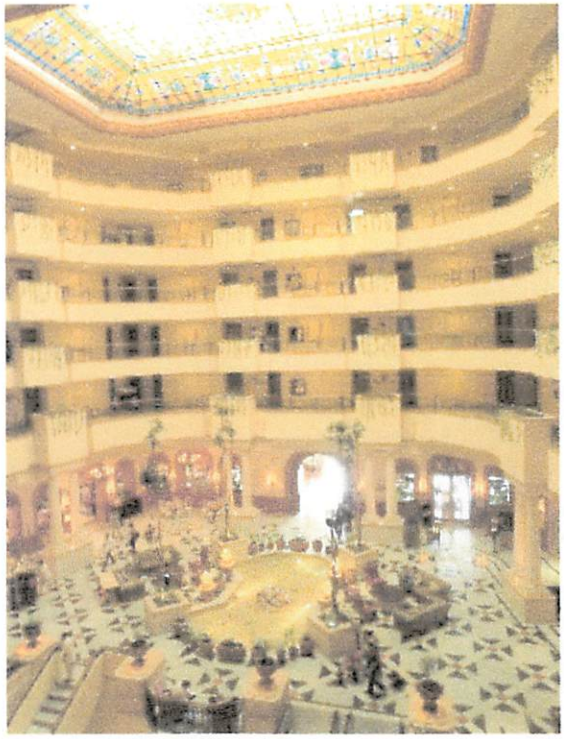
〒169-0075　東京都新宿区高田馬場4-4-19
国際文献社内
『行動分析学研究』編集事務局 宛
電子メール: jjba-edit@bunken.co.jp
Tel：03-5389-6492　Fax：03-3368-2830

ABAI Seventh International Conference in MERIDA Mexico

ABAI第7回国際会議 in メリダ

日本大学大学院総合社会情報研究科 眞邉ゼミ
藤原　誉久 ・ 松本　啓子 ・ 宇津野　裕子 ・ 村井　佳比子

去る2013年10月6日から8日の3日間、メキシコのメリダにおいてABAIの第7回国際会議が行われました。ご承知の通り、ABAIには北米で毎年実施される年次総会と、2年ごとに北米以外の世界各地で開催される国際会議があります。この国際会議は亡き佐藤方哉先生がABA会長を務めておられたときに提案・実現され、現在に至っているものです。また、今回開催地になったメキシコは、研究者の数でも世界でもトップ3に入る行動分析学が盛んな国であり、スペイン語で書かれた行動分析学の本もたくさん出版されているそうです。通常、国際会議は年次総会よりもかなりコンパクトだとのことですが、メリダでの3日間の会議は83のプログラムから構成され、16名の研究者の招待公演やシンポジウム、100を超えるポスター発表があり、“コンパクト”とは言い難い、熱気ある



Fiesta Americana

会となっていました。そこで過ごした3日間についてご紹介させていただきます。

午後4時、東京・成田を発ち、ヒューストン経由でメリダ空港に到着したのが夜の9時過ぎ、ヒューストンでの待ち時間を入れておよそ20時間の旅でした。メリダはリゾート地で有名なカンクンの近く、メキシコ・ユカタン州の州都で、マヤ遺跡の上に作られたという、とても趣のある治安の良い町です。気候は湿度80%を超える蒸し暑い熱帯雨林気候。国際会議の会場となるFiesta Americanaは落ち着いた高級感あふれるホテルで、私たちを気持ちよく迎えてくれました。

私たち眞邉ゼミ生・修了生4名は眞邉一近先生より一足先にメリダ入りし、先生の到着をロビーでお待ちしていました。そこに眞邉先生と一緒に現れたのは杉山尚子先生です。杉山先生にはサンパウロ大学のヒュブナー先生(Martha Hubner)をご紹介いただいたり、学会や行動分析学についてお話をしていただいたりと、3日間、大変お世話になりました。

今回の会議には、関西学院大学の中島定彦先生、庭山和貴さん、常磐大学の長谷川福子さんも参加されており、お食事をご一緒させていただくなど、普段はなかなか気軽にお話しできない方々と特別な空間を共有する機会を得ることができました。国際会議の醍醐味は、海外の研究者との交流はもちろんのこと、このような機会がなければなかなかお話しすることのない日本の研究者との貴重な出会いの場にもなっているのを感じました。

2日目にはポスターセッションがあり、広いホールにずらりと並んだパネル一杯にポスターが貼られ、活発にディスカッションが行われていました。Experimental Analysis of Behavior Areaでは中島先生、眞邉先生が、Applied Animal Behavior Areaでは長谷川さんが、また、Autism Areaでは庭山さんがそれぞれ発表されました。

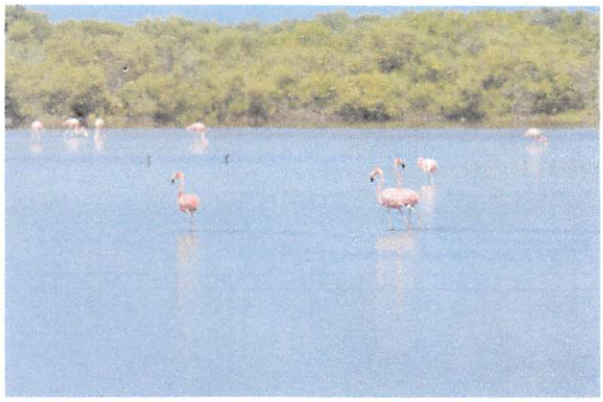
Poster Session

ところで、わが日大総合社会情報研究科は通信制の大学院で、対面で行われる“面接ゼミ”とは別に、遠方の学生もゼミが受けられる“サイバーゼミ”というシステムがあります。これはネットワーク上でのテレビ会議システムを活用したゼミで、世界中のどこからでもゼミに参加することができるというものです。メリダでの国際会議中、修士課程の中間発表が1週間後に迫っていることもあり、会場であるFiesta Americanaのロビーなどで2日にわたってサイバーゼミを実施させていただきました。傍目から見るとかなり怪しい集団だったかもしれません(笑)。杉山先生もお付き合いくださり、おかげさまで充実したゼミになりました。

Cyber Seminar

最終日、眞邉先生のご友人であるリード先生（Allison K. Reid）のテンポの良いご発表をお聞きするなど、いくつかの Paper Session を渡り歩いた後、Closing Celebration の時を迎えました。

Closing Celebration ではヒュブナー先生の閉会の挨拶とともに、次の開催国である日本の代表として杉山先生が紹介されました。2 年後、日本では 2 回目になる国際会議が開催されます。私たちがメリダで充実した時間を過ごせたように、日本にもたくさんの研究者のみなさまにお越しいただき、再び充実した時間を共有させていただけたら…と思います。ありがとうございました。



自然保護区のピンクフラミンゴ

＜連載：いま，こんな研究会しています（8）＞

教育臨床学研究会

榎本　和生（多摩美術大学）、白石　紳一（埼玉県立大宮光陵高等学校）
中野　良顯（日本行動分析学会理事、教育臨床研究機構理事長）

毎月第 3 土曜日、月例研究会をしています。直近の 10 月例会は、2013 年 10 月 19 日午後でした。会場は学習力創造アカデミー（曙橋、文末地図参照）。首都圏、岐阜、神戸などから 10 人ほどの会員が集まりました。

最初の 1 時間は恒例の 2 分間スピーチ。話し手は仲間の「聞き手」に向かって私的な出来事や問題や野心を語ります。聞き手は話し手の独自な認識に出会い、相手と対話します（佐藤『授業を変える学校が変わる』小学館, 2000）。

この 2 分間スピーチは、元会員の木下茂の提唱によってプログラム化されました。ある参加者は、「堅いイメージとはかけ離れた 2 分間スピーチという形で研究会が始まることに喜びを感じます。発せられる言葉に見え隠れする参加者 1 人 1 人の時間に、この人はどんな人生を歩んできたのか想像を掻き立てられる魅力ある瞬間です。日常の仕事の世界ではまず出会わない方たちが、時には優しくガイドし、時には厳しくリアクトする正に一期一会の場であると思います」と述べています。

リスレー（1977）流にいえば、2 分間スピーチは、自分の話を聞いてくれる聞き手が定期的に集まってくれて、その聞き手に向って自由に語ることによって、「自己」（言行一致するセルフ）という言語行動クラスが強化されるという重要な社会的文脈であるともいえるでしょう（Risley, T. R. The social context of self-control. In R. B. Stuart (Ed.). (1977). *Behavioral self-management.* pp. 71-81）。

この 2 分間スピーチの後は、例会の主活動、すなわち 2 時間の資料提示とフリートーキングが行われます。

10 月のテーマは「応用行動分析学とは」でした。資料は中野が以下の 7 点を用意しました。①『応用行動分析学』（明石書店）第 1 章（2 - 43 頁）、②第 1 章の要約パワーポイント、③ベア、ウォルフ、リスレー（1968）.中野訳.「応用行動分析の現在のいくつかの次元」（『ことばの獲得』、川島書店）、④中野（2013）「応用行動分析学の父：ドン・ベア」（ベアの白鳥の歌「法律家への手紙」（W. L. Heward et al (Eds.). (2005), *Focus on behavior analysis in education*, pp. 3-30）、とバッドの「ドン・ベアに捧げる」（K. S. Budd, & T. Stokes (Eds.). (2003), *A small matter of proof*, pp. 273-276）を紹介するパワーポイント）、⑤ウォルフ（2001）.中野訳.「自閉児の行動問題へのオペラント条件づけ法の適用：25 年のフォローアップと、ティーチング・ファミリー・モデルの開発」（W. J. O'Donohue et al. (Eds.). (2001). *A history of the behavioral therapies: Founders' personal histories*, pp. 289-294）、⑥ラツカー（2008）. 中野訳.「トッド・リスレー（1937-2007）」（*American Psychologist, 63*, 6, 559）、⑦リスレー（2001）. 中野訳.「良いことをしよう、データを取ろう」（W. J. O'Donohue et al. (Eds.). (2001). *A history of the behavioral therapies: Founders' personal histories*, pp. 267-287）。

ベア、ウォルフ、リスレーの論文（1968）「応用行動分析の現在のいくつかの次元」は、応用行動分析学という応用科学の主要な特徴を描いた重要な論文ですが、これはベア 37 歳（1931-2002）、ウォルフ 33 歳（1935-2004）、リスレー31 歳（1937-2007）のときの作品です。いずれも 30 代の少壮のサイエンティスト・プラクティショナーでした。しかもウォルフは『応用行動分析誌』の初代編集長でもありました（3 代編集長はリスレー）。

リスレー（2001）は「良いことをしよう、データを取ろう」という論文の中でこう述べています。もし単純化を許されるならば、ビジューとベアは世界を「説明すること」（explaining）に、ウォルフは世界を「修理すること」（fixing）に、自分は世界を「探検すること」（exploring）に魅せられていた、と。

応用行動分析学は、1960 年代初頭にワシントン大学で懐胎され、1968 年にカンザス大学で開花しましたが、上述の資料はどれもその創始者たちの当時の考えと行動活動をいきいきと描き出しており、まことに興味尽きないものでした。

資料解読後はフリートーキング。参加者はこれらの ABA 草創期の第 1 級資料に刺激され、活発に話し合いました。精神分析が主流だったワシントン州の子ども病院という敵の陣営の中で、ウォルフ（ワシントン大学ポスドク）とリスレー（大学院生）が、自閉症と知的障害のディッキーに眼鏡をかけることを教え、食物強化子をこともなげに使って機能的話し言葉をシェーピングすることに成功し、周囲を驚倒させたというドキュメントは、私たちを知的に興奮させるものでした。

ここまでがフォーマルな研究会。それから例によっていつもの中華料理店に場所を移して、紹興酒を飲みながら「行動の科学、われわれの振る舞いについての科学、われわれとは何者かについての科学」（ベア）としての応用行動分析学について、さらに議論を深めました。研究会の世話人である榎本和生によると、ここからが本当の研究会ということになります。

ここで、この研究会の歴史をお話ししましょう。起源は今から 35 年ほど前の 1970 年代初頭の東京学芸大学附属特殊教育研究施設での勉強会でした。当初は水曜研究会（呼称、「水研」）と呼ばれていました。毎週水曜日、自閉症児の個別指導と集団指導を終わって、その後 17 時から 19 時過ぎまで、中野が翻訳して清書したロヴァスやウォルフやリスレーやケーゲルやシュライブマンなどの自閉症臨床の実験論文をみんなで輪読し勉強しました。参加者は 10 数名で、東京学芸大学大学院生はじめ、栃木、千葉、東京、新潟、福岡などから派遣され東京学芸大学に留学していた小・中学校の現職教員でした。野村東助、中川四郎、長瀬又男など学内の教授らも熱心に参加されました。

1983 年、中野が筑波大学に異動すると、「水研」もともに移動しました。筑波大学では自閉症の小集団社会技能訓練プロジェクトのための「社会技能訓練研究会」も、「水研」と並行して行われるようになりました。会員は筑波大学学生や院生など約 10 名ほどでした。

1994 年、中野が上智大学に移ると、水研は「行動分析研究会」に衣替えしました。毎月第 2 日曜日、午前 10 時から午後 5 時まで、上智大学で行われました。会員が交替で日ごろの研究を発表しました。会員は上智大学学生、院生はじめ、小・中学校の現職教員など約 30 名でした（当時の今井義人会員作成のクロニクルによると、筑波大時代の 1990 年度から上智大の 2005 年度末までの 16 年間に研究会は毎年 10 回前後開催され、発表件数はちょうど 600 件となっています）。

2006 年、中野が NPO 法人教育臨床研究機構を創設してからは、名称は「教育臨床研修会」に改められました。会員は NPO 法人の職員、小・中学校の現職教員、企業の研究員など約 20 名でした。

そして 2008 年 12 月、今度は榎本和生と白石紳一が呼びかけ人となって、「教育臨床学研究会」が発足しました。教育臨床学研究会という

名称は、中野のNPO法人「教育臨床研究機構」の設立趣旨を汲んで採択されました。中野は筑波大学の教育臨床学講座の主任教授を務め、2006年にこのNPO法人を設立しましたが、その設立趣旨において、「教育とは人間の成長と学習への援助であり、臨床とは助けを待つ人々へのサービスの提供を意味します。教育と臨床を合わせた教育臨床学（clinical science of education）は、人間の生活と行動を科学的に解明し、その知見を人間の発達と学習の問題に応用して、その解決に貢献することを使命とする人間発達援助学です」と記しています。榎本と白石はこの「教育臨床学」を研究会の名称として生かそうと考え、そしてNPO法人の活動の一環としても位置づけて、毎月法人のホームページ（http://www.n-kids.net/）に例会案内を掲載して、広く参加を呼び掛けようと提案しました。

この研究会は、学習する仲間と出会い、第一級の最新の情報や資料に触れて、自分自身が成長したい、仲間の成長する姿を目の当たりにして支援したいという、強い内発的動機づけをもつ人々の集まりです。また、人間についての洞察を深め、自分が生きているコミュニティにおいてよりよく生きよう、人のために役立とうという志を持った人間の集まりです。言い換えれば、そうした目標を強化刺激として、自ら強化される人々の集まりです。

このようにこの研究会の名称は1970年初頭の立ち上げ以来変化してきましたが、一貫して貫かれているコンセプトは、「ともに学びともに追求する」です。

次の11月例会のテーマは、「応用行動分析学の基本概念」（『応用行動分析学』第2章（45 - 843頁）ですが、しかしこの研究会は、応用行動分析学を学ぶ研究会として特化しているわけではありません。

例えば、その前の9月例会では、NHKテレビ番組「課外授業ようこそ先輩大友良英」を鑑賞し、大友良英著（2011）『クロニクルFUKUSHIMA』、同（2012）『シャッター商店街と線量計』が紹介され回覧されました。

中野をはじめ会員が次の例会までの1ヵ月間に発掘した「これはいい！」と思われる優れた映像や書物や論文が予告メールによって会員に通知され、賛同が得られればそれらを強化刺激として持ち込み、それらを素材にして自由に議論する、そういう自由な研究会です。

最後にこの研究会の実施要領を記すことにします。

実施日時：毎月第3土曜日 14：00～17：00（8月は休会）

実施場所：「学習力創造アカデミー」（03-5368-1175 曙橋A2出口徒歩3分、下図参照）

活動内容：2分間スピーチ、中野作成の資料提示、質疑、自由討論。

参加費：2,000円、学生・院生1,000円、初回オブザーバーは無料（参加費は資料作成謝礼、資料印刷製本代、茶菓代等の運営費に使わせていただきます）。

連絡先：（世話人）

①白石 紳一（埼玉県立大宮光陵高等学校）
E-mail：JBG02306@nifty.com

②榎本 和生（多摩美術大学）
E-mail：enomoto@tamabi.ac.jp

参加資格：希望すれば誰でも参加できます。ただし、継続して「共に学ぶ」ことができる人を優先します。希望される方は、世話人までメールでお問い合わせください。

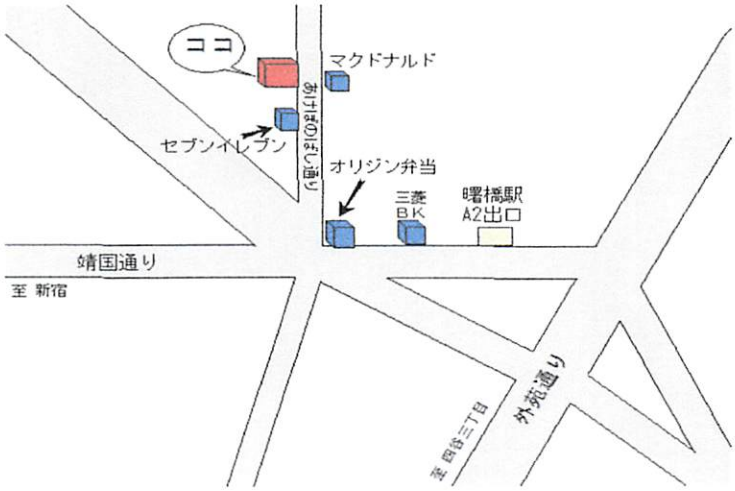


図　学習力創造アカデミー（あけぼのばし通り）

＜連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職（11）＞

長い海外生活を終えて

黒田　敏数（愛知文教大学）

以前、院生の頃に「海外で学ぶ学生、海外で働く専門職」シリーズで留学経験を執筆する機会をいただきましたが、今回はその続編です。高校生の頃より14年間アメリカに住んでいました。大学生の頃に行動分析学に出会って以来、基礎研究を専門にしています。昨年末に帰国して、今は愛知県の大学に勤めています。久し振りに日本での生活を再開させたのですが、アメリカでの経験は今も自分の中で生き続けているように思うことがよくあります。今回はエピソードを添えて、そのお話をさせていただきます。

留学中に身に付けたもので、大学の仕事に役立つものと言えば、もちろん心理学の知識や英語力です。心理学は日本でも人気のある科目のようですし、英語力があればそれを開講言語とする授業も担当でき又、日本人教員と外国人教員のコミュニケーションをサポートすることもできます。しかしこれらは技術的なことであり、実際に最も役立っていると感じるのはアメリカでの暮らしの中で身に付けた価値観です。

アメリカには世界各国からの移民とその子孫が居住しており、様々な生活習慣や考え方が混在しています。そこでは日本の常識は１つの文化に過ぎません。日本の常識の中には他国では通用しないものや、他国の常識には日本にはないものがあることを知りました。混在する異文化に触れた経験から、常識に固執することをやめ、物事には様々な方法があり、それらを客観的に判断しなければならないという考えを抱くようになりました。これは行動分析学の基盤の１つである機能主義にもつながり、この学問の哲学を容易に受け入れることができたのは、このような経験があったからではないかと思います。

機能主義的な考え方は、今の仕事において様々なところで活かされています。教務関連の作業がその一例です。不慣れな仕事内容であっても、まずはいろいろな作業方法を試すようにしています。比較的能率の高い方法をみつける過程が面白いですし、同僚からは「やり方が合理的ですね」と言われたりもします。結果が同じであれば労力が少ない方が良いという考え方は日本でも同じのようです。しかし、「右に倣え」が一般的である日本人にとっては難しいことかもしれません。進歩にはある程度の常識外れが必要だと思いますし、それを実践しようとするのは、やはりアメリカで身に付けた開拓精神があるからだと思います。

学生を指導する際も、機能主義的な考え方が表れています。たとえば以前、あるイベントの企画立案をしている学生たちの世話役をしたことがあるのですが、中には「○○○をしたい」と、特定のイベント内容にこだわる学生が何名かいました。こだわりを持つことを一概に否定しませんし、彼らの積極的な態度に感心してはいたのですが、話を詳しく聞いてみると、特定のことをやりたいという感情論だけで、その趣旨が曖昧であることに気が付きました。そこで「『なぜ』それをする必要があるのか？」と問いかけ、各学生が考えるイベントの目的を明らかにしたところ、そこが不揃いであることがわかりました。

対策として目的を学生間で統一し、それを軸に企画を練るように仕向けましたが、当初はしたいことができなくなった学生たちが反発し、容易にはこちら側の考えを受け入れてはくれませんでした。それでも「こういうやり方もあるよね」という話や、「このやり方のほうが失敗の可能性が低いよね」という話など、時間をかけて学生たちに聞かせていったところ、個々のイベント内容は不揃いであっても、共通のテーマに沿った案を学生たちが徐々に出してきてくれました。そうしてでき上がった企画書は、基盤がしっかりしていたことで想定外の問題が起こっても大きくブレることもなく、イベントは成功のうちに終えることができました。

目的を達成するために複数の方法を考え出し、それらを客観的に検討することは、若いうちに身に付けさせておくべき力だと思います。特にグローバル化が進む今の社会において、日本の常識に捉われることなく、異文化の良いところは積極的に取り入れていこうとする姿勢は大事だと思います。また、アメリカでの実体験を話すこと自体も、学生たちの視野を広げることにつながるのではないかと考えます。日本ではできないようなことがアメリカでは比較的容易にできます。私の場合は国立公園が多数ある州に住んでいましたので、キャニオン（峡谷）を流れる河を筏で下りながらキャンプした話や、地平線まで続く畑を眺めながら旅行した話、馬に乗って草原を駆け抜けた話、本当は美味しいアメリカの家庭料理ことなどをよく話します。ただ学問の話や意見を述べるのではなく、実体験を話に織り込むことでストーリー性があり、学生たちにとって印象に残るような話にするよう心掛けています。

私の海外生活の経験は一例ですが、これから海外生活や留学を考えているみなさんにとって何かの参考になればと思います。日本行動分析学会の年次大会には今後も出席する予定です。その際は是非お気軽に声をおかけください。

＜自著を語る＞

井上　雅彦・平澤　紀子・小笠原　恵（編著）『８つの視点でうまくいく！発達障害のある子のABAケーススタディーアセスメントからアプローチへつなぐコツ―』

小笠原　恵（東京学芸大学）

このたび、中央法規出版より、「8つの視点でうまくいく！発達障害のある子のABAケーススタディ」を上梓させていただきました。

応用行動分析学においては、一人ひとりに応じた支援をオーダーメイドで作っていきます。何とも、一人ひとりを大切にする学問だと思います。ところが、オーダーメイドであるということは、非常に手間がかかり、そのうえ、その組み立てる過程に必要な知識や技術が十分でないと作成者が限定されてしまいます。応用行動分析学を用いた支援は、誰でも同じようにその手続きを行うことができるはずであるのに、ここにわずかな矛盾が生じてきます。これを解決するには、たくさんの実践例が公表される機会が増えることが大切なのではないかと思っています。3年位前だったか、編著者をお願いした井上先生は、「学術論文としては、発表できないけれど、大切な実践例はたくさんある。これを何とかしたい」ということをおっしゃっていました。これが、今回この本を作りたいな、と思った一つの理由です。

そして、編著者をお願いしたもうお一人の平澤先生は、ご存知のように、行動問題への支援に長年かかわられ、多くの研究をなされています。私もご一緒させていただく機会をたくさんいただいております。平澤先生は、行動問題への支援で大切なこととして、適応行動をいかに増やすか、というお話をされます。しかし、その部分の検討が進んでいないのが現状です。機能的アセスメントに関する研究が進み、その方法も確立されてきています。そして、長年にわたる研究から応用行動分析学を用いた効果的な支援方法は数多くあります。しかし、それをつなぐことがとても難しいと感じています。ある研修会で、他害と課題からの逸脱行動を行う自閉症のお子さんに、セルフマネジメントを用いた支援の経過をお話ししました。機能的アセスメントの結果をお話しした後に、「この子は自分の行動を自らコントロールすることができるだろうな、と思い、セルフマネジメントを用いた支援を行いました」と、支援の話へつなげたところ、研修会終了後、参加された方から「なぜそう思われたのですか？他の方法ではなく、なぜこの方法だったのですか？」という質問が出ました。その通りです。何となくでは、エビデンスや再現性を大切にする応用行動分析学に反してしまいます。しかし、機能的アセスメントとアプローチをつなぐ根拠を伝えることは、とても難しいと感じています。それが、今回この本を作りたいな、と思ったもう一つの理由で

す。

お二人の先生とお話をしながら、このつなぎに、「好みを利用する」、「行動問題の生じていない状況を利用する」、「選択機会を入れる」、「上手にほめる」、「先手を打つ」、「物理的な環境を整える」、「高頻度で行われる行動レパートリーを利用する」、「スモールステップ」といった8つの視点をすえました。行動問題が起こっている当該の随伴性を変容させる際のコツのようなイメージです。そして、行動支援計画を立案するときに、私たちがいつも大切にしている視点でもあります。しかし、きれいにこの実践はこの視点で行ったとわかれるわけではありません。いくつかが重なっているし、まだまだほかの視点があるのかもしれません。

本書では、23の事例を取り上げました。年齢は幼児から成人までと幅広く、障がいは知的障害、自閉症、ADHDなどさまざまです。16人の執筆者は、教員や心理、大学教員です。仮想とはいえ、執筆者が実際に行った実践を基にして書かれています。

まだまだ目を覆いたくなるような行動を起こしている子に出会い、子どもがそう行動せざるを得ないような環境を目の当たりにすることがあります。そうした環境が豊かなものとなることに、少しでも、寄与できたら幸いです。

2014年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」応募要項

国際委員会

日本行動分析学会は，創立20周年を機に，次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために，ABAIへの参加を助成する事業を開始し，さらに2007年度からはSQABへの参加も助成対象に加えました。また2013年度からは隔年で開催される国際会議への参加も助成対象に含めることとなりました。学生会員の奮っての応募を歓迎します。

1．助成対象学会：

2014年5月に米国シカゴで開催されるABAI第40回年次大会またはSQAB

2．発表の種別：

口頭発表，ポスター発表，シンポジウムやパネルディスカッションのスピーカー，のいずれかであること。ただし，口頭発表，ポスター発表では，第一発表者であること。

3．応募資格：

1）2013年10月1日に本学会の学生会員として登録されている者で，対象学会参加に対して他の資金援助を受けていない者。ただし，SABAが募集する学生発表者の大会参加費免除への同時応募は認められる。

2）申請時に日本国内に居住していること。

3）過去にこの事業による助成を受けた者も応募できるが，選考にあたっては，過去にこの事業による助成を受けていない者を優先する。

＜提出書類＞

1）規定の応募用紙に必要事項を書き込んだもの。応募用紙は，ニューズレター，学会ホームページあるいは学会事務局からも入手できる。

2）対象学会発表申込時に提出した「発表申込書」を印刷したもの。

3）ABAIが発行する「発表受理書」を印刷したもの。

＜助成額＞

応募者の中から2名に対し，1名につき75,000円を支給する。ただし，受給後，対象学会に参加を取りやめた者は返金しなければならない。

＜応募締切＞

2014年3月31日消印有効。

＜選考方法＞

過去にこの事業による助成を受けていない者を優先し，原則として，2014年4月20日までに，事務局において公開抽選を行い，常任理事会において助成者を決定し，該当者に通知する。その他，選考に必要な事項は常任理事会で決定する。

＜応募先＞

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
日本行動分析学会事務局
URL：http://www.j-aba.jp/
E-mail：j-aba.office@j-aba.jp

年　　月　　日

2014年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB 参加に対する助成事業」
申　請　用　紙

氏　　名： （日本語／英字表記）	
所　　属： （日本語／英字表記）	
E-mail:	
発表の種別：	□　口頭発表　　□　ポスター発表 □　シンポジウム　　□　パネルディスカッション
発表タイトル：	
指導教員の 署　名：	私＿＿＿＿＿＿＿は，申請者＿＿＿＿＿＿＿＿が， ＿＿＿＿＿＿＿＿＿大学に所属する私の指導学生で あることを証明します。 年　　月　　日 氏 名：　　印 所 属
過去の本助成の有無	有（　　年度）　　無

学会記入欄	
受理月日	受理番号
月　　日	

編集後記

今回も何とか無事にニューズレターを発行することができました。これも多くの先生方からご協力いただいたお陰です。

当初はニューズレターを発行できるだけの原稿が集まるか大変不安だったのですが、多数の先生方からご紹介やご推薦を頂戴することができました。また、今回ご執筆いただいた先生方には、こちらからの突然の依頼にも拘らず快く御寄稿をお引き受けいただきました。改めてお礼を申し上げる次第です。

次号以降も、まだまだ原稿は募集しております。ご自分の活動の紹介や、行動分析学について考えていること、あるいは現在の社会的事象に対する行動分析学的考察など、行動分析学に関することなら幅広くテーマを設定していただいて構いませんので、是非どんどん原稿をお寄せください。皆さまからの投稿をお待ちしております！

(NY)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を，会員の皆様から募集しています。書評，研究室紹介，施設・組織紹介，用語についての意見，求人情報，イベントや企画の案内、ギャグやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて，下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については，編集部において決定します。

● ニューズレターに掲載された記事の著作権は，日本行動分析学会に帰属し，日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

● 記事を投稿される場合は，公開を前提に，個人情報等の取扱に，十分ご注意ください。

〒582-8582　大阪府柏原市旭が丘 4-698-1
大阪教育大学　大河内研究室気付
日本行動分析学会ニューズレター編集部
大河内　浩人
E-mail: okouchi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp